

3/12(月)に3月定例会が行われました。テーマは「大震災被災地事情:南相馬市のケース」大震災・復興からまる1年の節目でもあり、タイムリーだったと思います。

アナウンサー・佐藤まゆみさんの実家が被災され、この1年を振り返ってのお話をお聴かせいただきました。「ご家族それぞれの3.11とその後」リアルケースに、心が揺れました。以下レポートです。

### <佐藤まゆみアナの献身>

震災発生時、認知症を患い南相馬市海岸沿いの老人保健施設に暮らしていた佐藤さんの実父は、津波に襲われながらも救出され、11日の夜までに自宅住まいの妻（佐藤さん母）、隣町の息子（佐藤さん兄）と合流できた。しかし、遠く東京・世田谷に暮らす佐藤さんが家族の無事を確認したのは、2日後、やっと1本電話が通じたときだった。

南相馬市は福島第一原発20Km圏内を超えてはいたが、爆発事故を察知した兄の判断で、翌12日には勧告を待たずして家族全員、自家用車で市外への脱出を試みる。しかし信号はマヒ状態。警察の誘導もないまま、適切な避難所探しは困難を極める。結局隣接する飯館村の小学校に一旦入るが‘要介護レベル5’の父を抱えたうえ、やがて放射能数値が高い飯館村には物資運搬車両が着かなくなる。避難所の食料品が底をつき始め、ヤキモキする佐藤さんに朗報が。被災地への物資輸送を希望しているボランティアとツイッターでアクセスできたのだ。その女性は化粧品販売会社の経営者で、自己所有のトラックで食料を飯館村に運んでくれるという。素晴らしい出会いだったと、振り返って佐藤さんは言う。「自衛隊も入ろうとしない被災地に、取り残された人の食料を運び入れてくれる民間人女性の勇気と熱意に奮い立った！」

この数日後、飯館村の避難所は閉鎖され、佐藤さんの家族は安全な施設である郡山の擁護学校へ移転する。地震発生から8日目のことだった。

後日談。ボランティアトラックは可愛いお土産を東京に持ち帰る。母の愛猫・レオが、一足先に佐藤さんの元に届けられたのだった。多くの被災者が、断腸のおもいで家族同然のペットを自宅や避難所に置き去るなか、まさに危機一髪の「レオ・脱出劇！」だった。

次に佐藤さんは父の入居施設探しに奔走する。関連自治体や行政機関に問い合わせを重ねた結果、地元・南相馬市と災害協定を結ぶ茨城県・取手市が受け入れを表明。寝たきり父と付き添う母の被災地圏外移動が決まったこの日、佐藤さんは両親が助かったことを始めて実感したという。あぶくま擁護学校の教頭の計らいで、郡山→取手の搬送には救急車が出勤。ラッキーだった。しかし佐藤さんは更に幸運を手繰り寄せるべく、この後も施設探しの手を緩めない。世田谷区内の施設が優先的に被災者を受入れる情報を東京都からゲット。「父を東京に呼びたい！」強い想いをもち続けた挙句、500人待ちの特養入居が実現した。3.11から一ヶ月半後、4月が終わろうとしていた。

粘り強く巧みな遠隔操作で、混乱の被災地から家族の救出を果たした佐藤さんの辿った道は、まさに危機管理の見本のような。厳しい環境・条件に怯まず、好転を信じ続けた献身の姿は、凜として清しい。<終>